



善先寺道名所圖會

三

ル 4
4500
3



門 凡 4
號 4500
卷 3



善光寺 道名所圖會卷之三

閣浮檀金 朝日山 社家 阿闍梨池 大本願 山王塚 經藏 定念佛 年神宮 如來堂 寺驛 目錄

北國街道 三門 昆沙門堂 高雄塚 辨財天 諸神塚 六地藏 牛頭天王 制札 大岑山 本尊如來出現

美和神社 二王門 四宜樓 鐘樓 秋葉宮 萬善堂 大佛 御靈屋 番所 熊野社 月蓋長者說

時丸の塚 御供所 寬慶寺 骨堂 兄弟塚 別當大勸進 寺中四十六坊 攝待所 大門町 諏訪社 百濟王說

早稲田 大學 圖書館
昭 33.11.13 燹
藏 書

本朝來現	聖德太子說	本多善光說	難波掘江
伊奈郡寺建立	檀越略系	堂内年賀式	光明常燈
戒壇廻	汰然上人舊跡	親鸞聖人旧蹟	笹字名號
善光寺四號	鏡の御影	年中行事	寺領
元録造管録	善光寺紀行	苜萱堂	血脉頂戴
ゆんじ薬師	山吹の瀨	長原温泉	善光寺七社
同七橋	同七清水	同七井	同七塚
栗田刑部城趾	横山信濃城跡	塩沢温泉	桂山古城
飯繩里宮	御供所	仁科氏宅	飯繩奥岳
駒返	千日屋舖跡	篋屋	飯砂
天狗の遊所	飯繩原	劔ヶ岑	

善光寺

登り丹波寫(一里あり)越後の方へ下るふの善光寺より荒町(一里半)礼(二里半)柏原(一里)野尻(一里)越後の関川(一里半)足との順路七里あり野尻小湖水あり其流を越後の今町の濱へ海へ入る此川と関川とついで野尻の湖水も流れて同様に氷凍つめたる其上を人馬も往来せり但飯沼と八雲りて巖室の初ハ同荒く浪高く氷結り次第春に氷りて始て凍まり湖中に害あり辨財天と安を按るに半礼より柏原野尻越後の関川二膳関山二本木荒井と中山八宿といふ又善光寺ハ北國街道の宿驛なりて本名水内郡柳原庄半井郷長野村なり如來此所小辻座の後比名もさし猶とて惣名善光寺と称する成べし

善光寺より東へ伊勢町新町淀が橋と渡り横山村の次三輪村の南脇小美和神社と路ハ神名記に美和神社水内郡小美和の一也社家ハ高友伊豫ちといふ三輪村ハ北國十五丁ハと云々三輪村の北脇小時丸の塚とて古墳あり善光寺七塚の

三輪村
美和神社
神名帳
水内郡小八座
の其一なり



春江補畫

○定額山善光寺

水内郡榑原の庄芋井御
長野村の靈場なり

天智天皇三年甲子草創也むく天台宗はく三井寺持なり
其後真言宗と成く高野山に属しき寛永年中東叡山
に属しき再び天台宗に帰次

本堂南向高廿丈二重屋根撞本造柱の数百三十六本垂木の数法華
經に文字の數 法華經文字の數はおよそ
六万九千三百八十四字なり 小准ふかり四方に上段有正面

の板舗小大方香基と置く香爐の右脇に太鼓あり左脇小花瓶あり
松をえる足と親鸞聖人淨手生の松といふなり 毎月朔日小
挿代中なり

本尊閻浮檀金阿彌陀如來と本堂西庇の間に安置し御厨司四方に
戸帳あり應安二年申三月三日と記き其外を綾錦金襴等
みく七重の包むといふ秘佛ゆて毎朝の閑扉といふ戸帳扉一重
閑くのまはり中の間より東へかき善光善祐彌生の前を安置
はくといふ善光を中央小わき事故あり夏如也

塩尻

善光寺本尊ハ一光三軀之是を新小模鑄しるら尾張國熱田乃
僧定尊法師靈夢によつて建久六年五月十五日中尊ハ
鑄成し同く六月二十八日小菩薩と鑄せるとかんちと之尊
別軀れえり又画像ハ伊豆國走湯山の僧淨蓮上人兼久
三年の春告によつて御戸と開き尊像を拝し自画像せり
同年五月佛工越前の法橋海繩鑄鎔して模せりや

按小定尊法師ハ九歳の時法華と誦き夫より三十二年ハ間法
華と誦せりて凡四万八千九百部と云其後又法華一字毎
に拝し弥陀乃名号一遍唱へて一千部小満川實に建久六年
四月六日其功畢り其年十二月六日善光寺如来の告と感得
し一万九千人の慈施を勧縁して金銅乃尊像と模鑄し云
抑善光寺ハ本尊を生身の阿弥陀如来と称する所以を崗侍り
其むり中天竺より大聖釈迦牟尼佛長者月蓋乃慳負なる代

定額山善光寺

寺中之圖

其一





其 二
 河内 乃
 浄光 月
 又とせは

不便小思召一方便と以く西方の聖主阿弥陀如来と影向さるゝ
 其誓願を説き其奇瑞と示現一長者が最愛の娘をたゞ先五
 百人の眷属より國中の諸民に難病等を平愈たさるゝり給ひ
 うた月益長者夢の覺る如く殆隨喜の泪にむせび信仰の
 思ひ肝小銘ト忽ち内外清浄の本心立現了釈尊の淨許
 小衆りやきやう其くい今れ三尊の淨形を摸一奉り我室内に
 安置一甚重れ芳恩を報一奉らん然も吾九丈の力小争に
 かるひ奉らむ我々志願と哀愍一給へと有り仏長者に告結り善
 哉く殊勝甚一志うへ高浮檀金を以て鑄模一真躰を此土小止
 めたすべしと此金の尋常れ金より汝龍宮にある所然ハ神通を
 羅漢より得り求ると得人目連を以て其使と臣龍宮塔小おめ
 志むべしと宣つり一舎の丈流是を関く彼竜宮城と申其行程八万
 由旬の境其上漫く坐る汐谿の底波浪烈く假令神通第一たり





とも争う至る人々やとほぶれたり目連忽ち机舎に持念と悟て進出て
曰吾昔時佛の音辨れ遠く他方に響き給ふまこと計知らんが為に
遙の仏土を飛越て光明盤世界に到り是とめてたうふ何ぞ竜宮
城よりとらんやと易に事あはれとて扱き此勅意を兼て其佛
立く左の足ゆく大林精舎の北乃椽を踏みつと見れば右の足ゆく龍
宮城小飛行より一會の大衆肝を消し靈感するより外せるにかく目
連尊者竜宮城小到り其形勢を見るに四面小築地あり銀の門を連
内より数多れ小籠その威をありて守護しきり外乃陣まい
四方に四節此景氣と作る玉の薨金に柱瑠璃乃麻水晶の壁に玉
の簾をより緑竹志調悠々と蘭蕙乃薫り給り門を守護そ
れ眷属に手長足長とのふ者有り其力金剛力士の如く嚴く衛
りたるは容易入るるはかたしこれ目連神通をりて虚空より
入らんや思ふ所に内より赤衣の官人出く是を竜宮城より身乃

如き人倫の境界あはれ早く本土に帰すまの人の其つれ目
連尊者佛勅に趣とのべまを彼者聞く扱き世尊の御使者るそ
やまらひ上人言上すまを有るるに急に内に入り伴の首
を上参りまを龍王聞りひたあはれ是にて南殿に請り
く様くの供養と演へ其後龍王出會く尊者に對面ありまを
目連佛勅と伸て曰西方極樂世界より化現來臨乃如來志御
形を摸り奉りて末代の衆生を利益せんまを預りまを鑄
纂り奉りて龍宮城の珍寶商浮檀金小撈るる金形一望のふ
とらゆ是形り給りて此金を佛に送りまを其の上を
持侍給ひまを竜王より聞りて此金を此金とすれ珠より
は土にむしり第一の重寶なりこれ此土あり田畠を耕り奉
るけといふ穀あるる形り園小素なるるは絹布の類ひを補きま
業成たると唯安樂に渡りてまを此金の徳より夜合れ

此法うり足く走しん事如くふん佛の財金と成とも送り
奉りてはるるいえそ持叶ひしはと宣つて日連関くおの
やう吾佛前におひく勅を受殊ふ大衆れ中よりは使者に持
たせむむね帰らん事本意なると業なり神力を現し
棄ひ取らんを完やまじとさなりし思ひぬさなりし不解し
易なるまやりのやあむむと何とされお給ふ言よせし釈迦佛乃
因位のまうしと我語り給ひる 中畧 龍王是を聞て城下理下伏
しさる氣色やく斯ややく尊者怒りまうさるを伴に隨ひ
此紫金を捧申さんさるがう容易く来せんも尋常の給ふ
實れ如くや思ひ給ふを記竜宮第一の重宝なるよと演く奇
異の譽ふ預らん為かひ申せしは所ふ此金さるいしを仏勅を
蒙らん尤くは尊者の来臨もさるる具る仏勅具はは資料
なり事ねし申さるきと其位座を起宝塔の扉と開き閻浮

檀金二十七百兩と手自取ぬ 恭に捧奉らる日連紫金を受
取此功德廣大なるよ 護教して利那小毘舍離國に皈て閻浮檀金
と世尊に奉りてひる世尊歡喜し給へ月蓋長者も悦び度限なく
かくて彼金を玉の鉢に盛て臺上に備置彼三尊と請へ奉りて三尊
忽光明を放ちて照しぬ又釋尊光明をえられしをれ光明あり
閻浮檀金と照しぬ不思儀からるれは金忽やつしき沸きかぶる
成にちつ干時釈迦牟尼仏三昧禪定小入らせ給ひ淨身に積歩
給へる功德六度十婆羅密十力四無所畏三十二相八十種好内外
一切乃功徳を現しぬ又然し禪定より出さるるひ令に向
印し給へる忽三尊の聖容小違つて金色乃佛體と變りぬ
持者發き良あつて本佛歩より給ひ新仏の頂と三つに接た
はへ新仏又三度禮し給へ二仏同く虚空に飛より住ま
ぬ其高きより七多羅樹の如く俱小光明を放ち神變不測なる

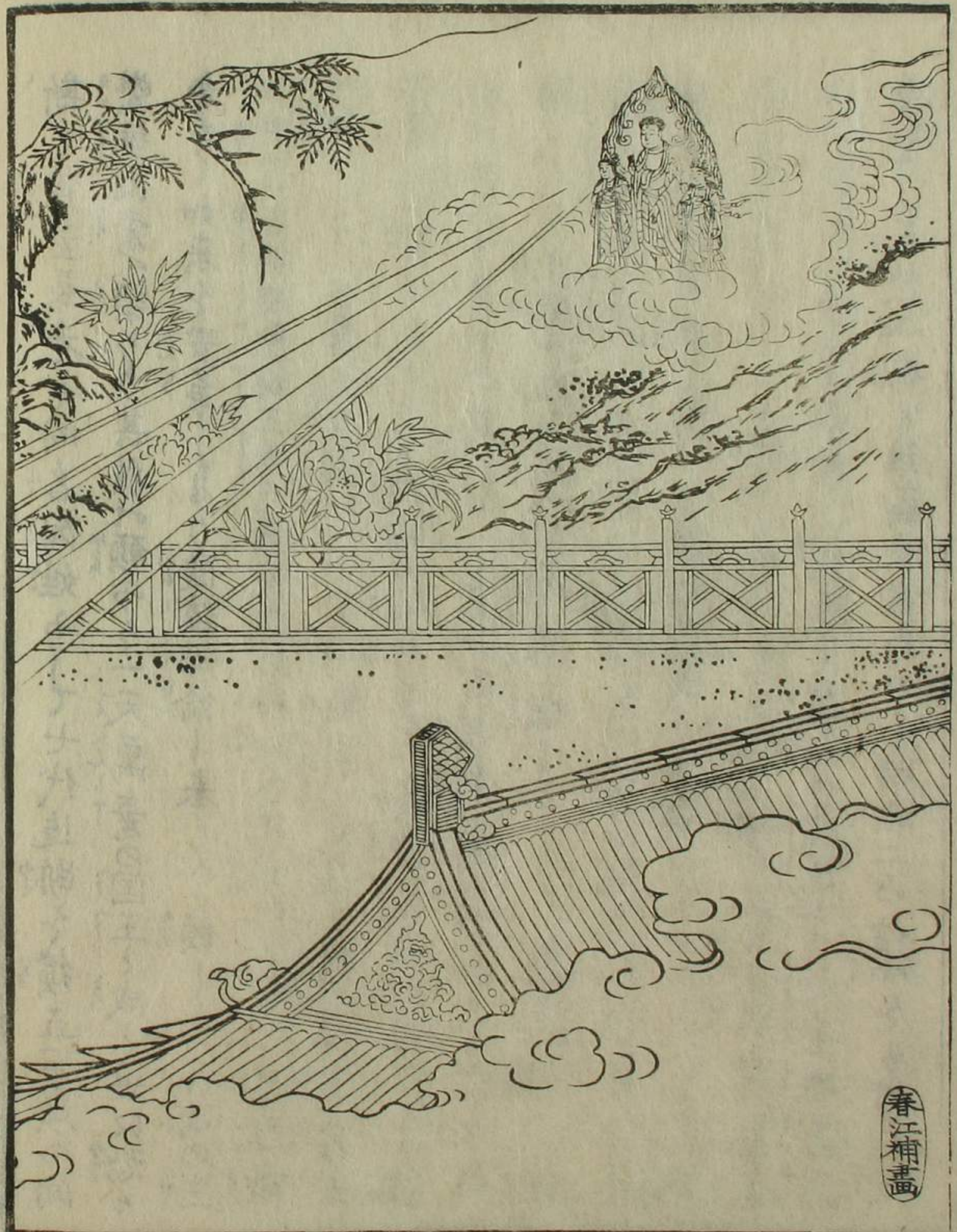
粧ひを現し西方に飛行のひを月蓋遙小拜と奉て夢とたりに申るるに新佛を依り奉るる南閻浮提の本尊とたりたり未永劫の衆生に至る迄利益と蒙りめんが為之乎我願を空しく本土にを帰るるぞと歎き悲々々々虚空よりあつて来るは壽とたりて汝暫く待へ本仏を送り奉り必歸来ると告せむひいりやがて飛版らせ給ひ西乃樓門の上に立ちまうとて長者歡喜あつて如來を請り入せ奉り金銀七寶を鑄りて大伽藍を建立し五百人の比丘を扶持し六八弘誓の願力をあき不斷禮拜すつて是併大聖釈尊に厚恩なりかかあつておのぞかかほ奇特の有る長者を初其外乃眷属總々毘舍衛國の万民とやぐ々大林精舎に詣りて菩提の道に入らる我朝に出現し給ひ善光寺如來を申ら此御佛に佛事形也

正身如來重廿六貫三百目 前立二尊一佛重廿八百七十目宛

斯く月蓋長者も同名同姓ありて七代迄跡を續五百歳の間榮華に榮る樂あり其後此願を一天萬葉の國王と成り世に恐る者なく如來を安んじまうり隨值供給し奉らん願し其後の生れ佛力ぞり本尊天竺國ふまうりて衆生と利益し給ふ其年月五百年の間より夫より百濟國に飛行あり是即月蓋長者今も彼國乃大王と生れり所以なり如來は百濟國の禁闕に望み空中に佛々々々光明を放ち給へ玉殿庭上耀きまうりて見たり諸々の臣下上下の官人ともいふいと怪しめ天子を此く御覽し驚き給ふ事限り如來光明の内より顯れりあつて諸の辭を告給ふ事限り如來を告げしを四十八願の主西方極樂に教主たり左右の侍者の救世は大悲衆生護念の薩摩り抑聖明王の前身むり天竺に在り月蓋長者たり一時無二乃信心をもち我



如来
 百濟園乃
 禁闕小出現
 聖明王の前身
 と示したる園



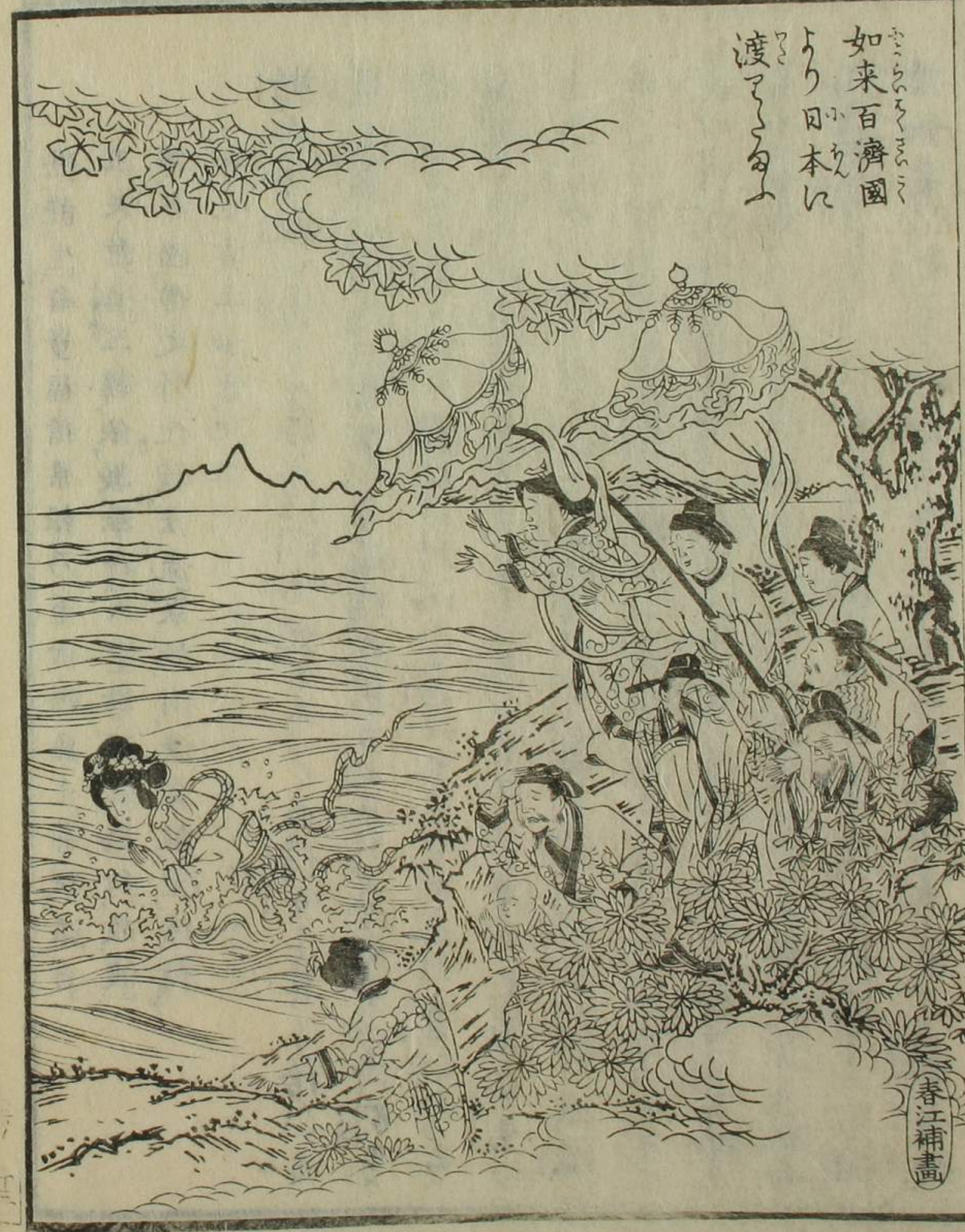
極樂淨土より吾を請ふるを切らるるふより吾又應化して長者并
に眷属と初其外群生と濟度も是偏小我奉願不取正竟乃誓ひ
ゆへなり此功德に依り長者の願望に如く帝位を備ふる志をも十
善の榮華に誇り野無常と忘れ三寶を歸する志を失ひとあり
亦惡果此業とたれば後まこと三途の故郷に歸りて永劫の苦みを文
む事見らるる志のびも昔れ機縁をさげらるる友小濟度利益を今
此處小未現せりや告るる淨輝聖明玉耳にうると忽宿習開發して
信仰の心肝小銘し感涙袖小餘り庭上ふらり玉の冠を地よつと悲愧懺
悔し虚空と礼し給へりとて玉殿をあらはし佛間と稱し如来に
請し奉るる尊れ如来微笑の淨眸を迴らし空中より紫雲に乗
殿中に入り移るるを異香四方に薫し光明耀きつらりて万億の燈火を一
度やらるるに雲より御門を初后宮を女諸臣百官渴仰恭敬し奉
り感信の誓をとり鳴きあがりて三業の精進を勵し六時の勤行

怠り給仕恭敬し修むる如來百濟國に御化導年月をうら
く一千百十二年や成にける其間の帝王九九代とぞ聞えり
然る小九代の天子を推明王とぞ申るる如來の帝に告るるや吾の
土此流生と機縁既小熟しねとば今より他方にある其所とて是より
東海を去るる一の國土あり大日本國と号し彼國に到り釋類を海
度までとぞ告るる淨門を初后妃百官下下までと聞傳へり御
つとと志し悲しむ事限りたりとて他邦に往り給へり示
現度にかれ千人の僧徒泣く外陣より出り奉りまらる餘に
淨名錢をとりてそまらり内陣に入るとせしが長老やらる始
如來此國に到る時雲に乗じて來りて坐すべし度もまこと空をうけ
て日本に渡りてうらら飛行自在の淨佛をば何とぞ免なると
も凡まの力や及がごり誓くも留め奉るまの眞の知見を憚あり
又佛慮も計りてごり只日本に渡りまらるるとやきればみゆり

此議小同トける所門中といは別を致き然しみ多しといふも併乃清
告かれバカ及を記を下して日本に送り奉り給ふ所船をこそ用
意し給ひ多し七寶といく飾り金玉の檀を揃へ錦繡の褥寶蓋を
めざり十人れ侍如來を清興に遷し奉れば大臣百官供奉
成たり所門中子后妃侍女の四方く玉れ簾を挑げ所名残と
とふふひら其外國中れ賤男男女小至る迄巷に色依は別
を惜む悲む舞四方に響くわらり斯く所船ふ移らせむ水主
梶取擢を取海上に漕出せし如來に附奉る日本への勅使
子々西部姫氏達率奴利致契思率多利致衍等其外二人の信
あり日本に添くく一の状云
純金一光三尊阿弥陀佛像長一尺五寸同脇士
觀世音菩薩得大勢至菩薩像各長一尺同奉副
經論幡蓋臣聞万法中佛法最善也諸道之中佛法
道最上也是法難解難入也周公孔子猶不知是

法能生無量福德果報乃至成辦無上菩提遠自
五天竺泊三韓依教奉行天皇陛下宣修行故渡
傳帝國佛之所化我法流東故附使貢獻宣信行
者也貢上如右已上

斯く所船と出くは所門后妃の侍女を具し給ひ日
頃も翠帳内居りし路頭へ出でせむ如來の所別を
怨し人の見る目を愧ぢる海乃邊に出させむい宣ひらら
我等五障は雲厚くとも三尊の光小照さ奉らむ事今生の
樂く悦びに以後をいふ業障の雲霧を拂ひ淨土に月詠
奉らん安樂れ別を翻し淨土の再會れ縁となさしめむと
自ら淨衣の襦袢と採り如來に供養し奉り所船小繼り乘移り
りしを見し其倭海中に飛入り大往生とぞむひらり乳母
大臣百官とありけ官女もそ騒ぎせれども力なく只忙然と
憧如來に別奉るみふ又所后めり別を奉りせむ誅妄執



如来百濟國
 より日本に
 渡りて来り

春江補畫

乃雲に迷ひたり我等とも曰く浄土に導かれんと稱名の多めり共
小續つゝ海に飛入りて埋りゆをまこと哀なり於て入水の人三百五十
餘人とて関し忽ち雲海上に變遷來り聖主來迎し引接しゆふぞ
有難と異香四方に薫り音楽響に施す極樂往生の相を現せり
人関人も相も及びし感涙ふ沈みきりけし國中れ貴賤日月の光を
失ひ只闇路と測れ心地して釈尊入滅の首に異なり後斯く浄土を
波浪と凌ぎ飛が如くに馳ゆれ島々浦々ら過く事故なく大日本
國攝州難波津ふ半夜の鐘と俱に着るゆふ大光明と放らゆへ四方
山々忽ち金色の光と成ぬる

抑我朝小生身れ如來來途あり人皇三十代欽明天皇れ御宇
十二年壬申十月十二日なり其比の内裏へ大和國山部郡斯岐宮乃金
刺の宮や中奉命去程ふ百濟國其官使并に二人の僧如來寶蓋
と昇り内裏乃庭上に居る推明王の書翰を捧ぎ其よりと奉り則

廠閣小達しきれ御門諸臣と召さく百濟國より渡り所の佛像經卷
受納せむとや否を問ふ此時一同に奏しきる外國より渡り所
佛像敢く納免るべし其故を彼國より日本を窺ふ事度く
然とも神國の威風ふ恐怖して近侍を能く今此像を渡り事
日本を呪咀し調伏する為なり人遠小法返りあり然るべしと奏り
志るに蘇我大臣稻目穴宿禰奏して曰くそ國小道有る徳なり道なり
い恥ぢり異國の華假令首は日本に野をばしとてさむと今を惡意
代翻し心け靈像と彼佛經を送る奈備に日本に威徳ふあり
や夫我朝も神國なり神明の本地を以てて貴敬せば可なりあな
還さきんに於て小智愚昧れ國なりと侮り吾國を窺りんと必定成
るべし尤尊信しゆふ形像ありしは皇御門召し蘇我大臣小
乃異國に使者に佛像安置供養の儀式を向し免給ひぬ天皇志
くれ由を廠閣より詔して小墾田乃所殿をありきり如來遷

く多し香花燈明をわす珍物寶物を供養し奉り禮拜恭敬し
あひたるかく異國の使者に引出物を賜り返書とあそ二僧と曹
所服を給りきれば使者を百濟國に送歸り其後我大臣の宅
に佛所代新小構へ如來を過し奉り金銀珠玉に莊嚴を盡し七
寶志檀錦の帳花綉帳蓋小至るまで善美を盡せり或時如來乃
眉間より光明とさなら十方を照し多しければ禁闕の殿舎宮女曹
司局に至るまで輝けりしりく実小生身は佛神たるをば露鶴不
思議教くゆく値遇し奉り輩利益を蒙らざるをば御代も
穩しゆく十九年れ春秋と我送り送る然れ小庚寅に當る今年
如何なるゆゑや在り所は疫癘流行して貧賤男女親よりの子とほ
きぎて是をくくみ其外牛馬六畜此隔なく市中山野小くりて歎の
夢止時を依り河内宸襟を愴し多し群臣眉代鬢むるをりり水を
内裏ゆは大臣公卿其外諸官と召さそ天下安全ありしむを評議

とぞ閑し召る其時物部遠許志大連卷同中ささたる信は疫癘
を致し小異國より不思議の仏像と渡りきて御崇敬ある故り
ゆゑ異なる像を本朝に渡り奉り其例を以て所なり依り我朝乃天神地
祇吳國の人形と崇り神祇の威を失ひ自らを怒り陰陽れ氣順環
勢は病病乃惡氣と變り國民を悩まし条明りたり夫吾朝を伊
弉諾伊弉册の尊より一氏も異姓を混せ給へ正し苗裔なり
然るに異國れ人形を供養し尊重し給り我朝の神祇の崇り
國土の人民小到るを争り吳人の形像と捨り崇り神祇を敬れ
給へしと憚り申されきば社郷一同此議小同し卷同中ささ
きれば河内もいよく閑り申り所實小志と信し多し評議既
小究りて勿辭りも生身は如來を失ひまきき我成小ける約有
しむる遠許志大臣下知りて河内抄洋より鑄物師數り召集り猛
火盛に吹立て勿辭りも如來と取て其中投入り七日七夜吹り



春江補畫



風戸皇子
守屋連小
襲きたる時
掠の吳樹の
危急と接を
奉りしなり

三十一

ども如來の淨身の色も覆うず聊もそわれぬ見聞の輩古の昔も
如來の身れ毛と立舌を巻て我怒せたる大臣も今興さ久穴怖ら
只水底に捨よそ難波の堀江にぞ捨よ其後世間にけりし希
有多うり記翌年辛卯の初夏小欽明天皇崩御まじり遠許志大臣
も疾病に床に薨りぬむう梅度波羅門も悪言を以て替替佛を
謗り替小よそ無間地獄小墮まり假令捨小摸き本に列むも以神
なう崇起し中我着る叔敏達天皇御即位乃後神不豫あり上下万
民怪しみ教を乞ひしり博士を召し考へさせ給ふに奏して曰神
惱の事前帝代は焼失ひも不伴像の崇りありと中神門
を初奉り諸卿大に驚給ひやがて勅使と難波堀江にけり給
さぬぐれ懺悔をせし申さる其時如來水面に現り光明耀きされ
ば急死此より奏聞しやがて内裏に結し入りぬぐの供養をな
し給ふる昔も過りて神惱を平ふるもせ給へ貴徳悦

びの色とあり萬歳を我唱へたる爰又弓削大連守屋大臣
遠許志の大臣思案を運じ素内折り奏しける先帝の神代に
居の子なり此人形と礼しわさば國土衰へ人民病惱きとて永く失ひ給ふ所
今又先君れ例に宵に給ひ尊崇し給ふと神不孝とやせらん奉朝
れ諸神怒をなし給ふ事必定あらん失ひ給ふに志くもあはれ也
帝又此議を信じ給ひ志すべ汝が奏する如く先帝の舊儀に隨ひ
吾朝の神祇を敬ひ奉らんと詔有る守屋大臣に悦び某が為しも敵せ
うこそ河内紀伊國より多人夫をり寄せ斧鉞を以て打碎らんと
まき元盤に碎け鋌を折て伴解と聊も損じ給ひ貴賤忙然とて
物より者なり守屋今力盡き大息突り假令千日千夜打と焼とを
損滅せせむ只元の如く堀江に沈めんとて黄金れ妙許伴具返水底
沈免金軸の経巻を彼の上におぼ漂ひたる又曰假令佛像を失ひゆる
附ちりた系僧を安穩に盡きを重く併法法知むとて一捕へ

本田善光難波堀
 江を通りて水
 中より光と放ら
 けり驚き走り過
 せしやが御聲
 ありて善光を呼
 止めぬし三尊佛
 ありて昔の機
 縁を示しぬち小
 走より生函信は
 供奉しなりしと
 則長光寺本尊一
 光三尊仏是なり



て法服を剥ぎ穿に押籠禁免たるかくと丙午八月小のろく敏達
天皇崩御ありて帝弟清位を継せ結ひ用明天皇と申なる清后ハ
穴太郎皇女と申なる然るに清后或夜の夢に氣高き僧法枕上に
在る后の胎内をやり奉らせん后の舌唇に自分胎内甚く穢れるものと
仰き後信の曰吾に救世の願あり我を去る西方よりと宮ノ拜と傳ふ
后此清口に飛入結ふと清後して懐妊ありてちるを徳太子是
胎内に十二月在る麻戸の皇子と云ふ皇子は法皇御孫古帝二十八年二月
五日薨じ壽四十九河州科長の陵に葬り今上の太子といふ
那皇
按る小厩戸此皇子の清降誕ありて候も不測の奇瑞さるく中
も初くて異國の經論をも流通し結ひあるは守屋の大連と文戦の
折柄も掠の靈本に隠りて其危難を適き結ふ事なと神怪しきに
似たりといふも爰に譬とる小神代の昔大己貴命諸神の精ふあし
結ひ一時嵐出く内々洞々外々宿々として己が穴か隠し奉りて
よりて焼野の危急を樂き結ひ例も比まらんや終ふは屋

と誅戮し結ひ難波堀江小如来と云言系をかり其佛教を受用
し結ひより承く本朝に其道知まり君臣上下信用者むと
事なく衆生化益れ奉代立結ふ事ハ大なる功勳功なりは是
併なり皇大神乃御を小應トたむいんば争り神國小跡
と垂結ひや爰をりくおまは神祇を尊崇するに次ん
む恭敬し奉るべき靈像と傳作がき多れ
人皇三十四代推古天皇十年壬卯に當る四月上旬に頃信濃國本田
善光といふ者都の勢事終り此序中て名所舊蹟を見巡りか
道此便おはる難波堀江にこつをけるが何ういふ水の中と宗
光よりて見えたりれはありきとてまやとまり過むとる後より
夢ありくやの善光怖る事たると我らと生世世汝小機
縁ありて安置さるる阿鉢陀伴なり汝静ふきけ昔の因縁
を示さん我汝を待り年久しや宮ノ御夢殊勝小吳香薰ト

々色バ善光たりすら信作の宿縁開發して不審ながら申々のハ
去りバ其過忒れありさるゝと示し結へと形り則は告に曰

昔在天竺名月蓋
次在百濟名聖明
今在日本名善光
我今尋汝來此處
生世護念汝
故我隨汝往東國
奉請如來致恭敬
我飛彼國被安置
三圍一躰同檀那
早仕宿縁皈敬我
如影隨形不暫離
欲令利益惡衆生

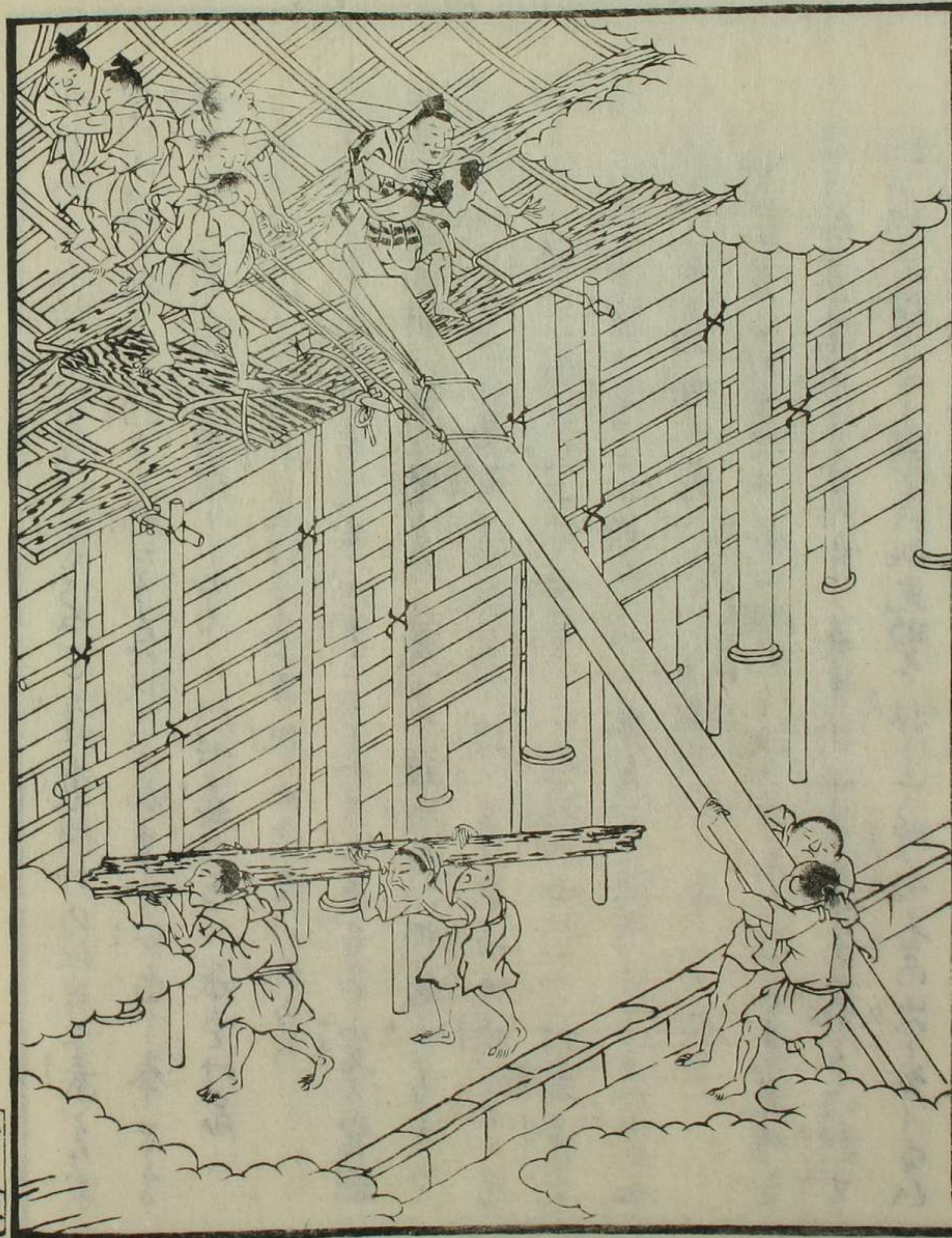
如來重て宣く我汝を待ん為度の水屑と俱ふ年月をふり之
凡十六年 時既ふ至とらり汝我を具して奉國より下るべし汝と一所に在
の向なり 爾既ふ至とらり汝我を具して奉國より下るべし汝と一所に在
く危生と利益まべしと併勅実あわると善光隨喜の涙よく
ましく思ふやう此如來靈吳天下にくまなり殊小上宮太子は歸敬
あまばとて王命と窺ひく後悦び勇ま如來と負ちて吾奉ふま
下る情万法一如の道理と按に迷へば則日本信州の棲茅屋土生乃

小屋乃土人悟ま百濟の堂はなぐら莊嚴微妙の仏界之素より家
の内小清き物とて白より外なるま此上小如來を安んず奉りて
親子三人偈よ朝夕恭敬し心をくれば供養をさし奉りけり
如來當國やく伊那郡に止住しより奉既小四十二年其間なり

人皇三十六代皇極天皇元年壬寅ふあつて如來告く宣く當國
水内郡芋井郷小我と遷まへ是より後彼所に機縁有なりや
示現彦く及びくまば則水内郡あぞ遷し奉り善光前より思
ひし如く佛と一所に住んる恐ありとて住居の西に一字草堂を
營みて本善堂と号し如來をうつし奉まども此所より又元の如
く善光が家母が歸り結ひたる不思議ありし事ども形なり

一時油ふ事とかきて清煎の燈明を批ざりきれば如來光明を
放ら結く家内白昼の如く善光祈誓やたるは其誓を以て利生
詞と以て演げ願くは此光明を移して燈明香の火とすめい

和漢三才圖會
欽明天皇十三年本尊如來自
百濟渡來而未信推古天皇
元年草創建寺於伊奈郡麻
績里宇治村



末代の傳人を利益衆生の結縁誠に功徳計りて...
光明即佛の頂に之を又眉間に光を放結し小香に法油
ふりり照させ結しぞ不測なる如来偈を唱へり

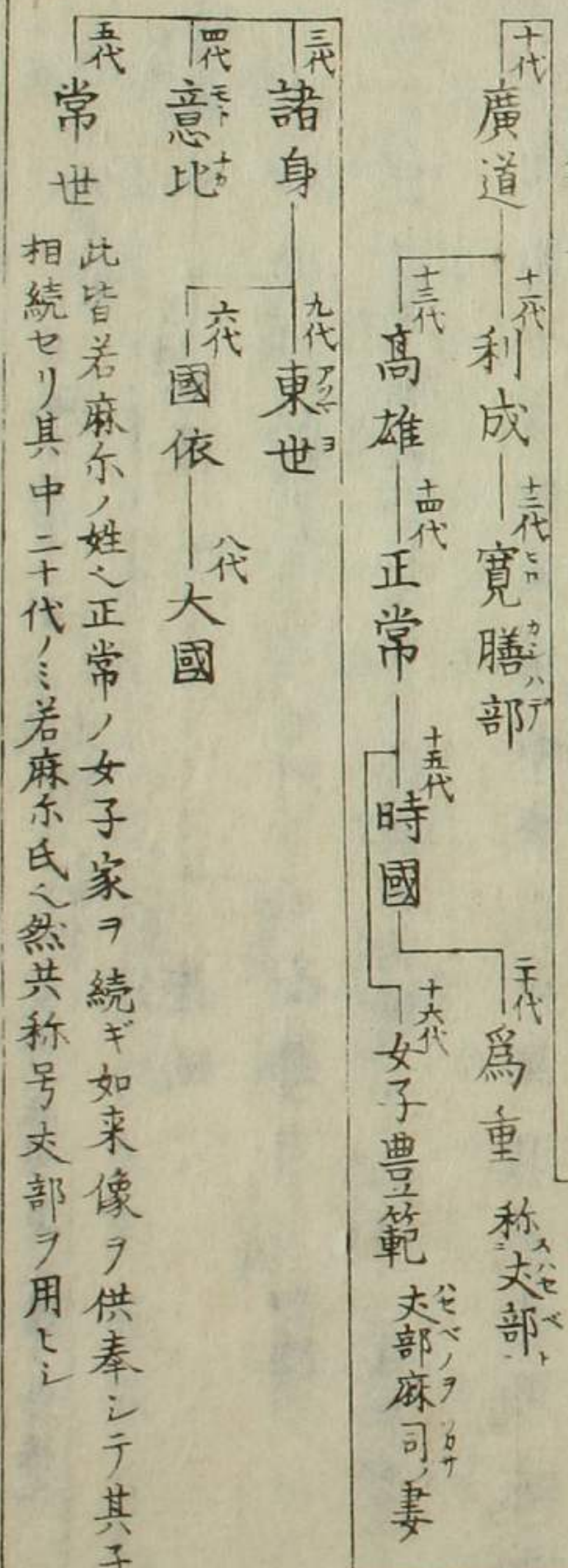
- 一度見常燈 永離三惡道
- 何況挑香油 決定生極樂

是即如来れ心光ありて三有の衆生乃迷闇と照し結する法を
その結し文なりは是は如来寶前の燈明と眉間の白毫より
出る光明にて救百歳を經ても更ふ備る事如く今猶佛茶
にめり結しとめり火是ちて

其後如来御堂建立れ事々御門の法願とて繁然御造營なり
抑材木と輓に至りてさるれ不思議なり諸天善神衆向りて
誰とくもぬれ材木自ら踊り歩む如く彼靈場少や集りされ
金堂を造るに彌勒并工匠と現して是を造り結し修造交終り

て後忽彌勒并と何れも天に昇らせ結しる彼并造營の間とみ
結する所に一間をまつらひ今れ世に至る迄彌勒の向と申す今此
善光寺の日本の邊地めて凡そ薄地乃草創といふも并の法を
以て建結し魔障あるとく却て守護神と成るれ事故たて成就
せし靈場とて何人々あるを作けりんや父が諱の字をりりて善光
寺とて号しるる如来を供養し奉る檀那畧系

△若麻續東人善光 信州水内郡平多ノ人 本多武佐善田
若麻續善佐作留 七代 若麻續高倚

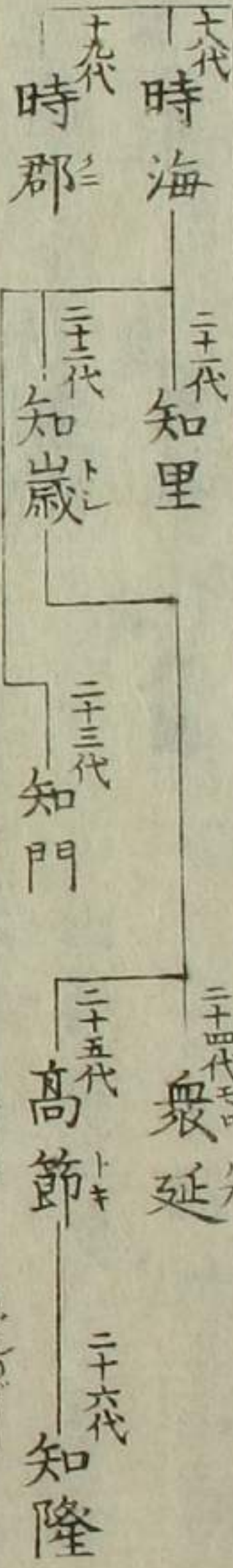


此皆若麻尔ノ姓之正常ノ女子家ヲ続ギ如来像ヲ供奉シテ其子
相續セリ其中二十代ノ若麻尔氏之然共称号丈部ヲ用ヒシ

○長谷豐範

若麻尔正常女 大正 大正 大正

大正 大正 大正 大正 大正



右檀越交名川次第益尾以見之より氏姓と相續人々如件 縁起同文

和葉三才圖會

欽明天皇十三年本尊如來自百濟國渡來而味信
 推古天皇十年草創建寺於伊奈郡麻績里字沼村
 而後皇極天皇元年依佛勅移水內郡建立本願主
 名本多善光因以為寺號慶長二年七月秀吉公以
 本尊奉入於洛之大佛殿然佛不悅而有奇祟故同
 八月復奉還

聖德太子為欽明用明二帝及守屋之徒菩提於清
 涼殿七晝夜令行念佛三昧而遣小野臣好古於善
 光寺奉一通書其文曰

名號七日稱揚已 以斯為報廣大恩
 仰願本師彌陀尊 助我濟度常護念

八月十五日

勝鬘上

本師善光如來御前

好古乘黑駒馳至以本田善光献上之善光副硯
 入之戶帳中則有返翰其文曰

一日稱揚無恩留 何況七日大功德
 我待衆生心無間 汝能濟度豈不護
 待賀彌天恨止告皆人爾何於何都天急加佐留覽

八月十八日 善光

上宮太子御返報

右歌載風雅集曰歎止可告蓋太子與如來往復之
 書凡三度七言二句或四句八句而其第二次法興
 元世一年辛巳十二月十五日使者各第三次同二
 年壬午八月十三日使子者黑木其返翰藏法隆寺
 寶庫而勅封緘無嘗見之者神佛靈異之有無也不

堪論

按埃囊抄等小史載之詳焉竊以年號雖有孝德
 帝大化号中絶後天武帝大寶以來相續故為之

年號始然則推古帝有法興元世之年号乎所味
聞也且此時文章未備而七言詩肇於大津皇子
四十一代天子又聖德太子薨去推古帝二十九年辛
巳二月也所謂支干皆當薨去之後也疑伴文章
及年月等後人添妄說者乎

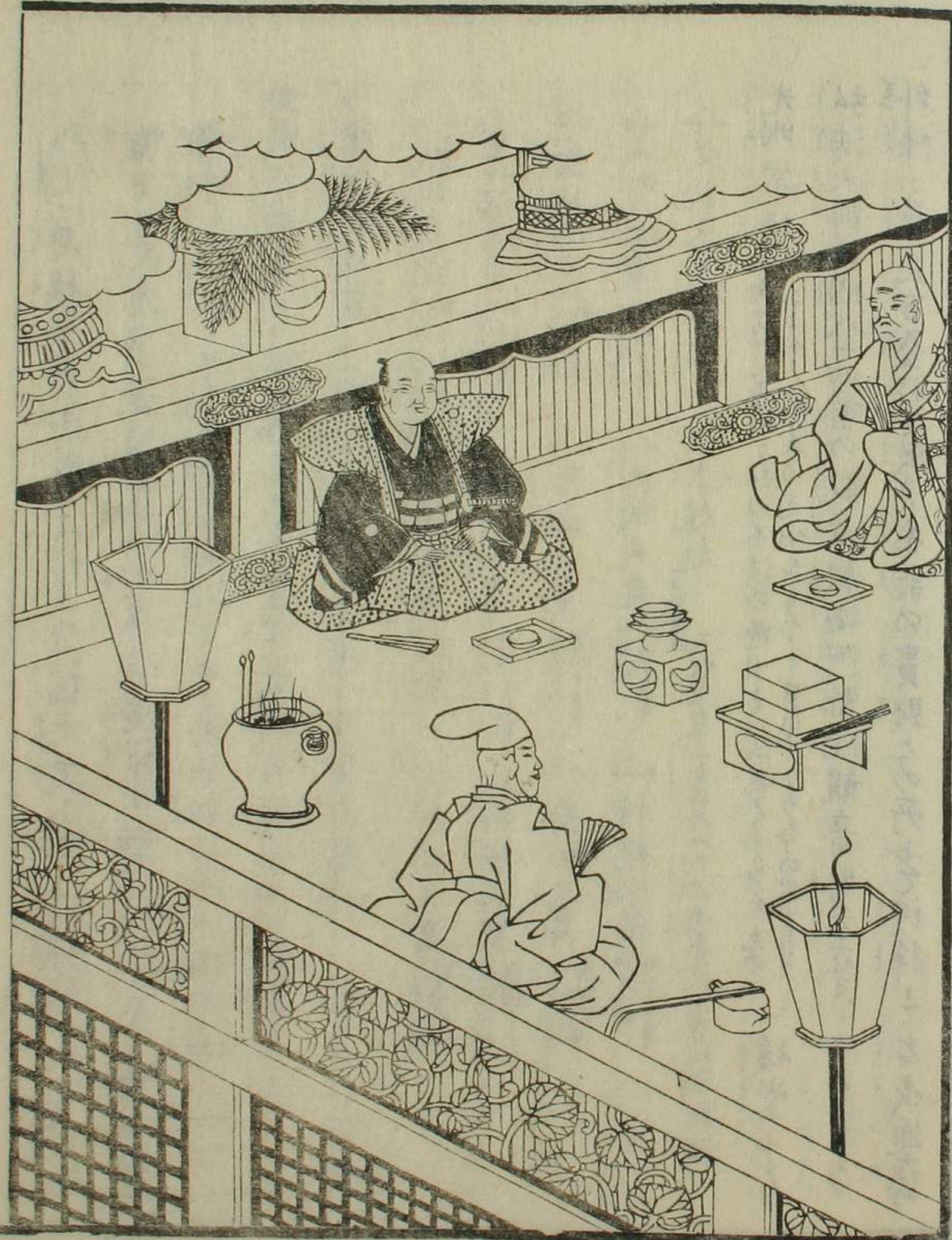
古今著聞集

鎌倉右大將上洛の時天王寺へ来りて其時鳥羽の宮別當
ありて其時天王寺の對面ありて其時幕下なりたるを頼朝が一
期りゆりき一度ゆりて善光寺の伴狹く奉らりて二きびく
其うちありて久定印ありてゆりて次乃とびら未近の
中ありてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりて
傳へてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりて
ゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりて

欽明天皇此御宇より孝德天皇の御代近年較百二年の間宮
殿小戸帳をかかれ如来ありて拜され終ひて然るに白雉五
甲寅此年に當り如来告させ給へり宮殿を營り我と納り前
に戸帳となせし其故ゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりて

寄る真氣をうけ手とらり我星を厭ひて却て逆罪と成
て皆惡趣小墮するなり依之く驚き恐と急ぎ宮殿を造り戸帳
を掛秘伴となり勢給へ是の始なり

按るに善光寺に佛堂ありて同禄小乃く有馬の相を示し給へり
いれ如来の薰位を以て天下の衆生志と屬し再建程り成
就り其古も舊記小見之を今縁起小載る所と見らる高倉院乃
御宇治承三年己亥三月廿四日己の刻小ありて悉く炎上たり
そのち龜山院の御宇文永五年三月十四日夜半に火起り是九十二年
同方り又四十八年後花園院の御宇正和二年三月二十二日酉の刻炎
上り其後又八十八年と過後光嚴院の御宇應安三年四月三日夜
宣の刻炎上又後小松院の御宇應永三十四年丁未三月六日午乃刻東
の門より火發りて堂塔一字も不殘燒滅又後土御門院の御宇文明年間も
冬上ありかく度り火災小を一光三尊乃靈躰或と忽然と横山



正月朔日夕の時
如来堂
如來堂
年賀の
規式

難波の小謡と
うらやまの三度
一花びらくちる天下
ふねと海をれやよる月
代乃を海安全そめてくみそ花

乃堂に飛移り或は清厨子のりり猛火文小至る錦帳の内光赫
 燦として恙なく或は紫雲小葉して金堂に移り移りて生身坐
 佛祚なきずして幸ある奇特のありき作ぐべし信をなす
 如來百濟國より素朝あつて聖主十三代打續る御崇教より或
 ち宮中に安坐し終ひし事をもりり其歴代

- △欽明天皇 人皇三十二代 在位三十二年
 - △敏達天皇 三十一代 在位三十二年
 - △用明天皇 三十二代 在位三十二年
 - △崇峻天皇 三十三代 在位五年
 - △推古天皇 三十四代 在位三十四年
 - △舒明天皇 三十五代 在位三十四年
 - △皇極天皇 三十六代 在位三年
 - △孝德天皇 三十七代 在位十年
 - △齊明天皇 三十八代 在位七年
 - △天智天皇 三十九代 在位十年
 - △天武天皇 四十代 在位五年
 - △持統天皇 四十一代 在位十年
 - △文武天皇 四十二代 在位十二年
 - 以上縁起 日本書紀 天智天皇三年三月百濟王善光王等以居難波
- 光明常燈 厨司の宝前小なり不消の燈明なり其くめ若光の
- 後堂 弘法大師四國八十四番の觀音釈迦阿弥陀觀音勢至等と安置せり
- 外陣 小疊九百疊程と敷き糸詣の貴賤この所を神祇と毎夜通夜の

- 人影一〇向拜の前中左右と賽銭管三有〇外陣小定香乃臺あり
- 其脇の花瓶に松を差そこれ親鸞聖人の手生の松といふ 毎月初日に
- 又堂よりて東西小鐘と掲より外より見得ぬ物なり常は撞きやなく
- 開帳の砌小用之〇戒壇廻りより有須弥壇乃東脇に入口より楷子
- ゆく下り内陣の下と三度巡る元口の口へ出る実に闇夜れ如く俗向小相
- 傳し放辟邪侈なる人とい所ゆく女と為り又怪異ありといふ未詳
- 御年宮 本堂の後より 此宮は昔八幡社なり今横沢町に遷してその跡之
- 毎年極月二の申れ夜丑の刻規式之〇鐘樓 本堂の東より 〇昆沙門堂 東二丁より
- あり別當所の別業爰小有 〇納骨堂 本堂の乾より 此處本堂の裏通より諸家乃石碑
- 多し〇經藏 本堂の西より 高四丈六寸二分横六間三尺二分四方なり
- 〇御供所 本堂の良より 〇蓮花松 如來法華經 〇十六善神 西五九月十五日大般若若其外
- 〇秋葉宮 西に有 〇辨才天祠 西に有 〇山王塚 諸神塚 本堂前左右 〇萬善堂 別當所の此ふつて
- 東向の道場なり 〇忠信次信の五輪二並び立 三門の内西例小あり古代の姿あり文字も斑小なり

○鏡燈籠石焼籠の支相馬彈正少弼室石川播磨守平岡美濃守室等と
始て諸國より奉納する所れ數九二百三十餘基終夜其光たる時か
以上山門の内なり
三門へ上る日へ正月十五日十六日二季は彼岸三月十五日四月八日七月十月十五日十月十五日十五日十五日

○三門高六丈六尺七分桁行十二間二尺三寸梁間四間二尺四寸文珠四天王を
安き○是より二王門までと誌し○大勸進西側ふ別當所なり東叡山
比叡山より任職なり○手水鉢三門外列當所○天王宮列當所の例祭

六月十二日十四日祇園會なり山車渡り夜々芝居狂言あり其外古椎カ
取祓り物敷多ありて賑ひ夥しく諸國より来詣多し是と善光寺の
法条禮といふなり○六地藏○大佛山門下東○釋迦堂世尊院本尊涅槃

槃の釈迦如来なり天延年中越後國古多分濱より出現の像なり
○駒返橋○寛慶寺山門のこの寺も慈覺大師に建立しゆく浄土宗と
時の鐘あり○定念佛堂宝林院小の響堂と云はし寺に東都新吉原の遊女

○地藏菩薩今仕より西側小あり昔の本堂此處なり
○阿闍梨池高雄石研あり十二年目毎小田向ありと云や昔皇圓阿闍梨地身と

成く此他小住るより詳なる傳をいふと聞む
按ふ小遠州檜が池いひり比叡山肥後の阿闍梨源皇といふる智藏と三塔
無雙の學者なり法然上人の師ありていほれ字と賜り源空と名乗りよるに
源皇はよく筆をとりて伴道の淵底我一世の修行ありて悟る事ありて孫
勒の出家を俟く三會に曉を初とていほれもそれまで命を保つに龍身
みちくおし是ふゆて才子等と諸國ふ下り龍の棲所を見りてむらに東
國の使者帰て来りて申す遠江國笠原莊小櫻が池といふあり南に
蒼海洋といふて北に青山峯と云り其間小池水を湛く淵底測り
たりと曰は澄みて龍蛇乃棲る靈地なりと申し阿闍梨是を聞て
一夜座禪して一滴の水を掌れ中に掲り雨風を起し雲小乗ト櫻が
池小池に入定し給ひるに波瀾さるるや驟雨車軸乃とく雷電
霹憲とて村邑動揺る其後源皇上人は圓小赴き池頭へ降り師
弟に別を喩り恩謝の為給陀經を誦し祇名念佛し給へ浅猿に
大龍の形と云き池上に頭を揚て落涙の侍なり源空上人もその源
を流し師弟に侍意あり本の人許やくいへる多しありとありとあり
龍身變りて源皇阿闍梨と成くまに越方行末の古物語なりと



心地つき

ちんちん

文屋好孝



御血脈
頂戴の圖

血脈を

つゞく

乃の婿

さくら

極楽

ゆく

まづ清の下に入るとぞい侍人侍ることへ皇圓阿闍梨此地方と
なりては池小住るといふも様々池乃類ひ形なり

○諏訪明神社 麦石の東に有る 祭礼九月十四日 ○熊野権現社 旧西に有る祭田 九月十五日 此西社二山の守護

神なり 神主斎藤 下総守 ○飯縄社 一山の火防 神主 ○箇魔堂 圖王の先年焼失日

○御靈屋 大本願の北にあり 浄土屋及び近年宮の宦府より此浄普請たりやといふ

○撰待所 旧行小 是より上壹町斗左右小店連りて数珠屋町や云東都

浅草雷神門の内なる小間物店の如く如來淨影の掛物并小教珠を

多く高し ○二王門 高サ三丈九尺二寸桁行六間四尺六寸 梁間四間二尺二寸南に二王あり 北に三寶荒神三面大

黒天 仏より ○大本願 紫衣の尼寺 任職の堂上方に姫君より善光寺上人と称

ま日本三上人の其一なり 日本三上人といふは善光寺上人尾州勢田村 普願寺上人伊勢宇治慶光院上人

○社家齋藤氏此宅 日向南に有る 下総守と号 ○法然上人舊跡 信坊小あり上人如來系譜乃 時返留の形あり自作の本像

○親鸞聖人舊跡 堂照坊にあり每字の号あり 并小肉付の浄齒あり 寺傳小曰兼元此法聖人越後

國府之遠流より建曆元年に春勅許たり其後常陸國へ浄通より

節當山之浄佛詣堂照坊に浄返留此間戸隠へ浄系詣の浄

婦風越といふ所小暫く浄休の時浄手厨小路傍に岩盤を

抹くといふ文字の形をかり終ひ即其夜堂照坊より每字の

名辨を授與しりまよ山々風越の番号ともいふ 建曆元年庚未年三月 上白法保留の附堂照

坊茅二十一世後阿大連 教智比丘の代なり 聖人横曾根正信坊鹿島順信坊と召連ら

之當山如來へ浄系詣此時花衣を差上給ふ今にいつく親

鸞松といふ傳 本堂正面の太鼓櫃小あり 毎月朔日小神登るる也 聖人肉附の浄齒一あり 堂照坊に

七十四歳に浄時より便御詠歌一首あり

いつ乃はゆ髪に霜むき一葉落ちありみそをまを阿弥陀佛

まよえ仁二乙酉年四月十五日浄止宿あり 堂照坊茅二十四世空阿大佐 了意比丘の附代なり

○聖徳太子鏡此御影 浄願坊小あり十六歳 自作の本像なり ○二天門 先年焼失して 礎の残まり 東の方

制札あり 松代族 西の方番所あり系詣の諸人坊へ着く者いけ所より

案内より本堂より此礎まで長四丁中三間余の敷石其基盤の面乃

如く是ハ勢州白子ハ大竹屋何某一寄進トシ是より南へ大門町迄丁
 新田町石堂丁ナリ北園街道の順路方々商家軒と継ぐ旅舎多し
 名産牛皮餅銅細工の店多く其外菓肴飲食器財等富有あり
 自由なるまじくし支那の男女の風俗及び言語追々東都の意氣あり
 て繁昌ハ佛都トシ一〇善光寺ハ四門四号トシ事ハ曰

- 東 光明遍照門 定額山 善光寺
- 南 十方世界門 南命山 無量壽寺
- 西 念佛衆生門 不捨山 浄土寺
- 北 攝取不捨門 比空山 雲上寺

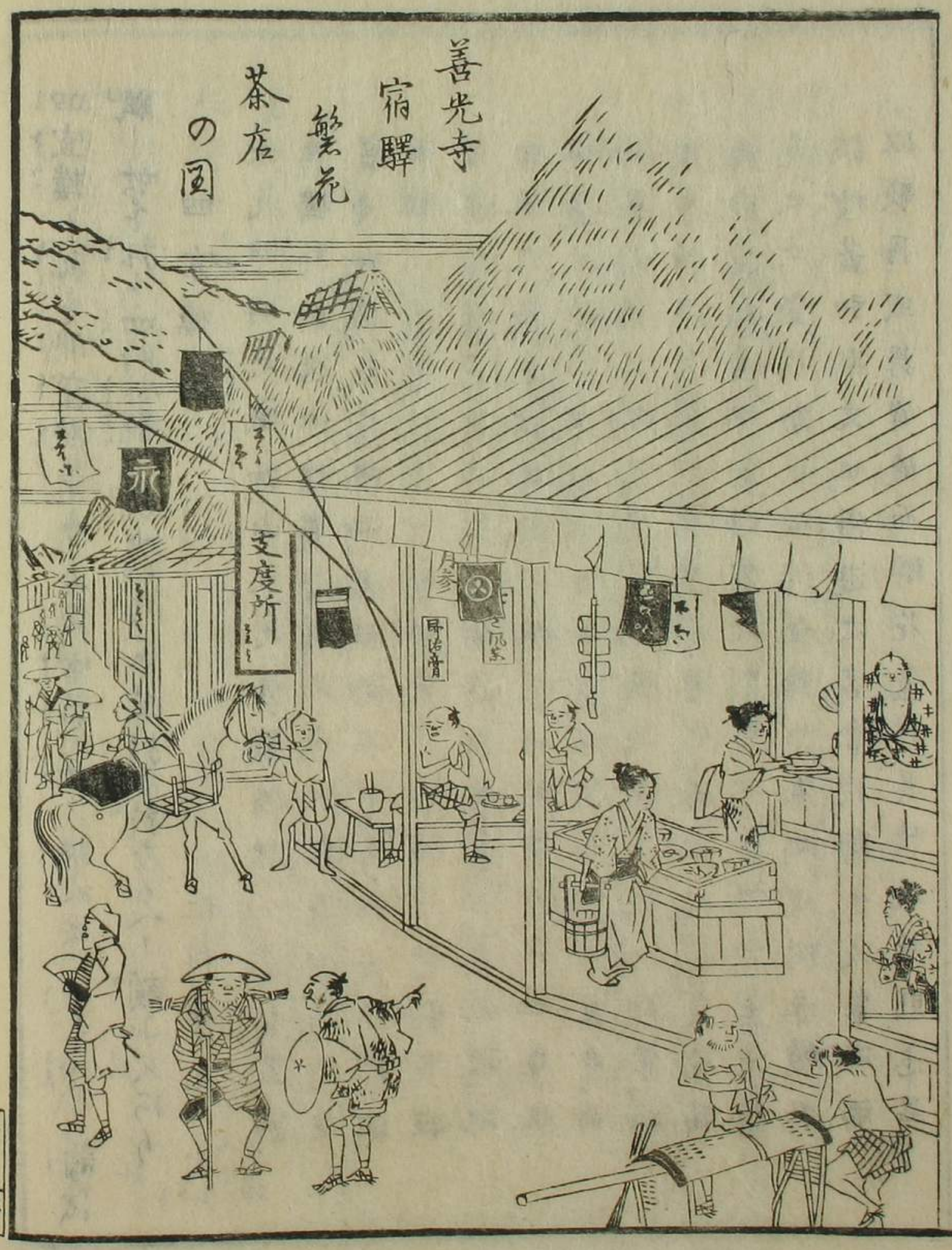
○善光寺街花山トシ二ヶ所あり所謂朝日山 本堂より申の方朝日右近トシハ
 大嶺山 本堂より居城より 宜家より山幸附 栗田刑部城跡 本堂より八丁辰巳乃
 乃大勸進の別荘と管む 近き頃垣外中腋の空堀を埋灸茶亭と管む

四宜樓と稱し眺望絶景あり月雪花の折は騷人及宮と傳し詩成
 賦一歌を詠し四時壯觀と異あり先づあまけ風致なる一額小文あり

四宜樓説

仁科索元

大凡四時之風物山水之佳觀備諸一處者蓋少
 其獨於斯樓也偃蹇營表而無比鄰飛檐郭如空
 翠清挾振百花拂砌春秋納其芳夏則涼冬則温
 面臨二水堪洗滌心背安梵王以擁三寶朝可披
 法雲迎慧日夕可出色相送真月衆禳爲之散群
 禎爲之聚實維佛都之鎮也地則爽塏而四垂坦
 坦遠之連山環匝林壑杳窈其間則田園萬井村
 落基敷臨然眼底望不可極况復羌風色時華物
 象忽換非可勝說也然而要之春宜彩霞夏宜新
 綠秋宜紅葉冬宜晴雪此則所以名樓也若夫藝
 苑之士登於斯也或淬筆鋒於墨池或樹赤幟於
 詞壇蓋知斯文也優遊之容會於斯也或舉瑛觴
 以歌月或舞嬋媛而醉花蓋暢其情也雖則志異



爲別。其樂一也。是故雅俗日到。而興無盡動。則感來神往。榮辱皆讓。噫。微先哲之誠。誰能憶歸銘曰。
崛起高樓。既高且邳。保以佳景。援以四時。
節物一倡。萬客來熙。幽賞搖情。燕興從思。
寵歸其主。永昌朕茲。山水貢壽。梵王頌禱。

○善光寺三寺中とて四十六坊あり其内衆徒二十一坊ハ

常徳院 教授院 最勝院 常智院 徳壽院 尊勝院 本覺院 玉照院
世尊院 長養院 常住院 宝勝院 威徳院 良性院 田乘院

以上清僧なり又中衆十五坊といハ

野柿坊 兄弟坊 正信坊 淵之坊 以上妻帯なり又妻帯十坊ハ 其妙坊
常田坊 徳行坊 隨行坊 向佛坊 白蓮坊 鏡善坊 淨願坊
壽量坊 常行坊 遍照坊 称名坊 以上清僧之此十坊昔ハ時宗ハ妻帯なり 正定坊

林泉坊 蓮池坊 玄證坊 善行坊 今ハ天台少ク清僧之成る黒衣小五条と着以規式少ク氣色ハ猿衣なり

○寺領 千石余の事小割 内 百石別當大勸進 五十石大本願 淨土宗

百六十八石衆徒二十一院 七十五石中衆十五坊 三十二石妻帯十坊

百二十石佛供免 大勸進 持あり 百二十石燈明免 良 三十六石大工免 大本願上 持あり

三百石造營免内 百五十石大勸進持 以上

○本堂詰番昼夜八人宛内。衆徒四人。中衆三人。妻帯一人なり。以所由て如來所教の寫し清字不淨除の守并以火打石等を授く

或老僧の曰む。兵乱の以依法も甲州乃属國と成る。武田家より如來を甲府へ移さる。甲府没落の後大岡秀吉公京邦へ移り大佛乃腹籠とれ。終り其後官家より先規け通じ還堂なり。夫多し。より靈威治場り光耀四方に著し。近里遠境乃老若男女貴とれ。賤とた。峻岨と厭ふ。寒暑を凌げ。歩と運ふ。も靈伴乃或後如來又或のい。昔如來依法の伊奈郡に座す。時善光の夢。小我を當國水内郡に移ま。一告彦。乃乃。素より善光身。自かに叶ひ。是小依。日國上乃諏訪武井社人下の諏訪春の宮の社人。曰く秋の氣れ社人。其外北野高島宮本平手和存。園根七澤穗谷金沢柄沢等社家十五人。今の中衆。守護。今之如來清年越の規式。少麻の淨衣。を著し。是を神衣。○如來の清年男。中衆少。勤む。但一堂照坊堂明坊。此役を。十三人。年。少。一人。清年男。を勤む。例年十二月二の申。日。清年越。

其夜并に除夜より正月十五日迄白麻の淨衣袴日くり物川まら帽け紋
小當り人ち一ヶ年潔斎まじゆく湯福妻科武井まじ三社まじ此三社まじ日米
級繩山戸隠まじ山へ月糸方り○翌年此法年男へ今年代堂童子より
送る物あり大根めて湯根法根の形を作りて二折ふ入るまじ俗々

○年中行事 ○正月朔日卯刻朝拜といひ規式あり大勸進の名代を始
め三寺中惣出仕是を客と称して勅盃の式あり口取ふ大根乃塩も菜
け塩漬二折なり古朱より定る議ありて大勸進の名代様よりむ其のら日
音かり其文句「一花開くれれば天下みゆ春方もとや万代のる月安令そ
日あされ是を三度返して信く堂中の産配ホ令く善光宅に右例
う法年男の真主の振めく各退出の時送るあり

○同七日寅乃刻惣出仕して開帳仲大の次小後三會別當清印文の加持
あり其後小三頭代甚なまつと通称へ是ら武田伝玄より法免の由ゆく如來へ清酒
を供へその由とて法年男と甚な唐門と益事あり

○二季の彼岸曼供會初中 ○三月十五日會式あり ○六月祇園會十三十四
西日冬

あり山車まじ燈籠まじ通まじ美まじ法圓の ○同晦日盂蘭盆會大鼓雲
系諸人足と歩まじ拜まじ儀合大那まじ代
版を打て大念佛あり ○七月十四日施餼鬼納骨堂に
坊に執り

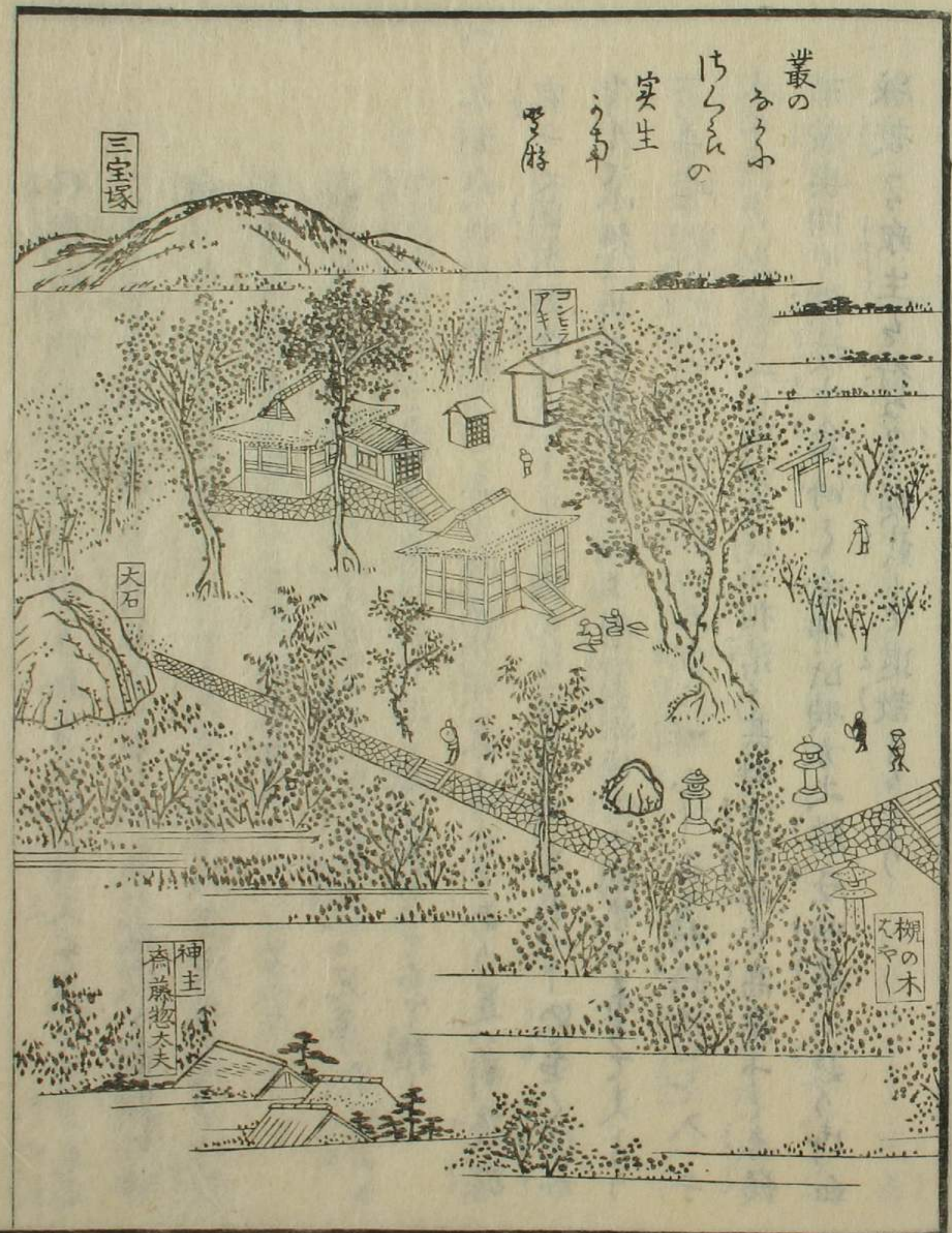
○十月五日より十四日迄十夜念佛黄金の阿弥陀一神開帳十夜供へては法厨子
の健大勢を大奉教障月まじ舞まじなり
同十五日如來正覺日ゆく舎式あり ○十二月朔日より法年男諸大
本堂に参詣 ○同日七五三繩張中衆殘らば法年男れ坊小系舎まじして祝
儀あり赤飯を惣寺中へ配る ○同く七日より十三日まで昼夜別事念
佛施行妻戸をりあり勤行足とトウく念佛といひ本田善光今日十二月
十二日ゆあり

○同九日法年男より濁酒の法酒法堂へ献備 ○同十日松を布け祝儀あり
大門町の傳馬役より百姓十人門饒の松并餅搗け薪牛王杖等儀
法年男の坊へ納る ○同廿日女人禁制ゆく餅搗鏡五飾と取法年
男の内小志めと張置除夜小至る浄堂へより正月八日小下る ○十二月
二乃申の日夜入法年宮に於て如來法年越の規式法年男淨衣秘受
たるに依り其行ひ知るまじ但備物より尺角折麦小片本三枚を

入と一枚小餅二つは飯白豆番大母とて等四品で盛て供へ西門へ入
 宛借つる今日駒が岳本堂より一里 余良の山 駒弓は宮より神主本馬と持参し
 是をとお駒迎とつ今日暮六時限定念仏も時の鐘も停止山内人
 拂へば式寅の刻小畢て勤乃鉦鳴を相圖小諸半解に成ふ○同二十八日
 浄堂煤納清年男奉行兩人少く執り小幣と竹小葉と結ひ招き注
 連を付る儀と後笠帯と別當行へ賜る○除夜より正月十五日迄清年
 男堂童子 淨衣神衣 着用浄堂小詰切同十六日退出○除夜子の刻
 別當所の名代并に三寺中惣出仕閑帳法會あり依之元初より閑
 帳かゝり浄供銘へ配當あり初拜乃 真見者 ○除夜より正月十五日迄浄堂其
 外の諸鍵も堂童子に預めし諸事一人のえりしむ○門傍の松
 竹は清年男れ門斗と正月晦日迄其傍候至二月初日お駒送りとて
 本馬を駒が岳へ送ゆく時は年男れ門杵竹も駒弓は神前少く焚捨
 て祭礼あり堂童子に勤足迄たり

○善光寺に七社七橋七井七清水七塚といふあり其七社を

- △武井神社 妻科神社 湯福神祠 美和神社
- 加茂明神 佐喜明神 木留明神
- △七橋を 花相橋後町 穢土橋新町 中澤橋 瀬本先橋栗田村
- 獨寐乃橋妻科 鶴八幡川 濟度橋武井村宮の
- △七井を 狐井腰村 来魔井三ツ家村 無方井西町 有方井大門
- 金屋の 窟目井後町裏 花井橋井 阿舍利井本覚院
- 裏小の 七清水と 箱清水箱清水村 盃清水岩井堂 濁清水新田町
- 有利割清水 柳清水美和村 鳴子清水妻科村 傾城清水湯屋村
- △七塚を 姫塚赤村在能谷直実の娘 行人塚栗田村 萱塚在法然上
- 人オ 席が塚岩石小流小在大磯の 盛長私記卷之三十六 小曰又爰に寺特
- ちる事なり祐成が妻大磯乃虎のちと髪と利らんとつと墨衣
- 袈裟と着く亡夫祐成が三七日忌日を逢へく箱根山に別當



叢の
実生
天石

三宝塚

天石

柳の木

神主
齋藤惣大夫



妻科村
妻科神社
建御名方命
八坂斗女命
貞觀二庚辰年二月
妻科神授從五位下
同五癸未年授從五位上
土人妻方の宮云
夫木
弟ふう紀世やね
ゆり乃
つる中ら
さやえれ
あんつね
うし
権僧云朝

たけくときぬる旅路のうら
妻ふりれい獨麻のけ
中、葦狂歌併圖

枯木

独木の

たけく村

男根石

過善光寺

南亭

傳聞靈像紫磨金。西域飛來利益深。當年善男女。依然此地古祇林。旭峰雲靄和。鑪氣丹水。波濤帶梵音。不是群生同渴仰。公程豈許此攀尋。

皇代代としく我新皇を志すや二世乃伴毛

伊勢荒木

久老

吾ひりり寺々月又は今宵の月

宗祇

月うちや四門口宗とくくく

芭蕉

遠のくぬされ極樂や布やき

支考

むく起乃く後涼や堂まの葉

蕙竹

又後日は蓮臺ひろに志此の形

露川

糸く福のたぐぬ園有りきく

曾木

山も眠けやれやまれば静け

盧元

静くくたらま志 露乃ひりり

輝牛

新波はふわと持めし佛も今に信はけり

蜀山人

我國ふみのりれ聲とくくくい清仙やけ失かる後

利忠

○新萱堂

寂照院住生寺と云 浄土宗智恩院小庵

善光寺如来堂より西八丁山手にあり寺内小親

子地藏并に素逆の松あり東南と瞻く見下して風景好き小院あり

此新萱堂寂照坊等阿法師入皇七十六代近衛院乃御宇筑前國主加藤

左衛門佐重氏同國三笠郡新萱の莊博多の城より居住なり重氏二

十一歳れ春花の下に帰らむるを忘さ酒宴と催し抱負の折り春乃

山風ふ蒼めつ花一輪落く盆中の浮む重氏はくく是を觀相して

難う百年を期そんわむ頻に意常れ心發り妻子孫實を厭離し

左所より捨忽然として帝都に赴き敵岳小登り西塔里谷を

敵空上人にまゝ利髪しきう等阿法師と号け于時仁平二年

四月二十四日方り爰小筑前箱寄八幡宮に神託小依り御弟子

源吉に降候し念佛修行者と成り十三年と往り高野山小登り

雷錫せり然るに嫡子石堂丸母りくも重氏の行末を尋ひ到りけり

とも恩愛を菩提の障りとして捨て親子れ名棄ちりて故永万九〇
石堂九判髪して寂照坊の弟子と成り信生坊道念と号し等阿
傳思へらく親子一山小在ても愛念捨れりて正治元年八月中旬
信濃國善光寺にあり今往生寺の境地小草菴とむを日如來
前小緒一會仏の外又餘念も有りたり或時通夜の爰に寫法沙
内室柱の前娘千代鶴うび十里の前善光寺如來とれ六地
慈と現下冥照と地藏の化身かりと争地藏の像を造立して衆生
を化益あえりと告終ひく夢覺ぬ依く地藏并と建立して人
皇八十四代順徳院の清宇建保二年八月二十四日享年八十二歳ありて
往生有り其夜高野山ゆく道念法師冥夢と感し父寂照乃今終
持ひたりとて急死善光寺に到り大法會を執り等阿自作の地藏を
を拜し道念も曰くかたつに地藏并を造立し建保四年七月廿四日生
年六十六ありて往生と云ふ新萱親子地藏とい是なり

○藥山ふんど藥師 善光寺より二里ほど丑寅の方へ山上の岩穴より
扇の如く木と見え出りて上小堂と建たり荒木田の久老考の文あり

藥山乃歌并序

久老

信濃の國水内縣小茅山とい山ありて山中に山ありて切まてる
如き千石此巖の中らもおほきなる木を若出りて持れりて入
ひてこれ屋を作りてその家から出るこの山岸よりうち橋
た川物をうつして通ふる矢りの欄よりえおろせば谷原
くつとおそゆる一や一とある岩川と河さ川といふらさうつとらつ
油に此川もより流き出りぬとの家ららにいつつき業師が
はられ石像ありて久老 致るんらの業師とほをれり少彦
名れ神乃みりてなるべりかくつゆえに延喜神名式に能登國小大
持乃石像の神社少彦名の石像に神社あり又常陸國に荒磯
崎業師善護の神社ありてあはれりての神ありて石像なるより



春江補画



薬山
ぶらんどの
薬師
長原乃
温泉
山吹の湍
薬山の約ヶ岳の
山脈より駒形
明神の宮より
のふ友名といへ
中山道の
約ヶ岳よ
りしき

山吹や
日も
永糸の
温泉れ
ふほし
中彦

三八四十一

続日本後紀小見へよりされ神の清像を石めて造るため
抑へく病をねむ道をしりしよりて茶師乃名代抄へ
奉まるものなりと云ふはあはれ薬師と云ふを必ずの神おたへ
は乃事終ひかろふ

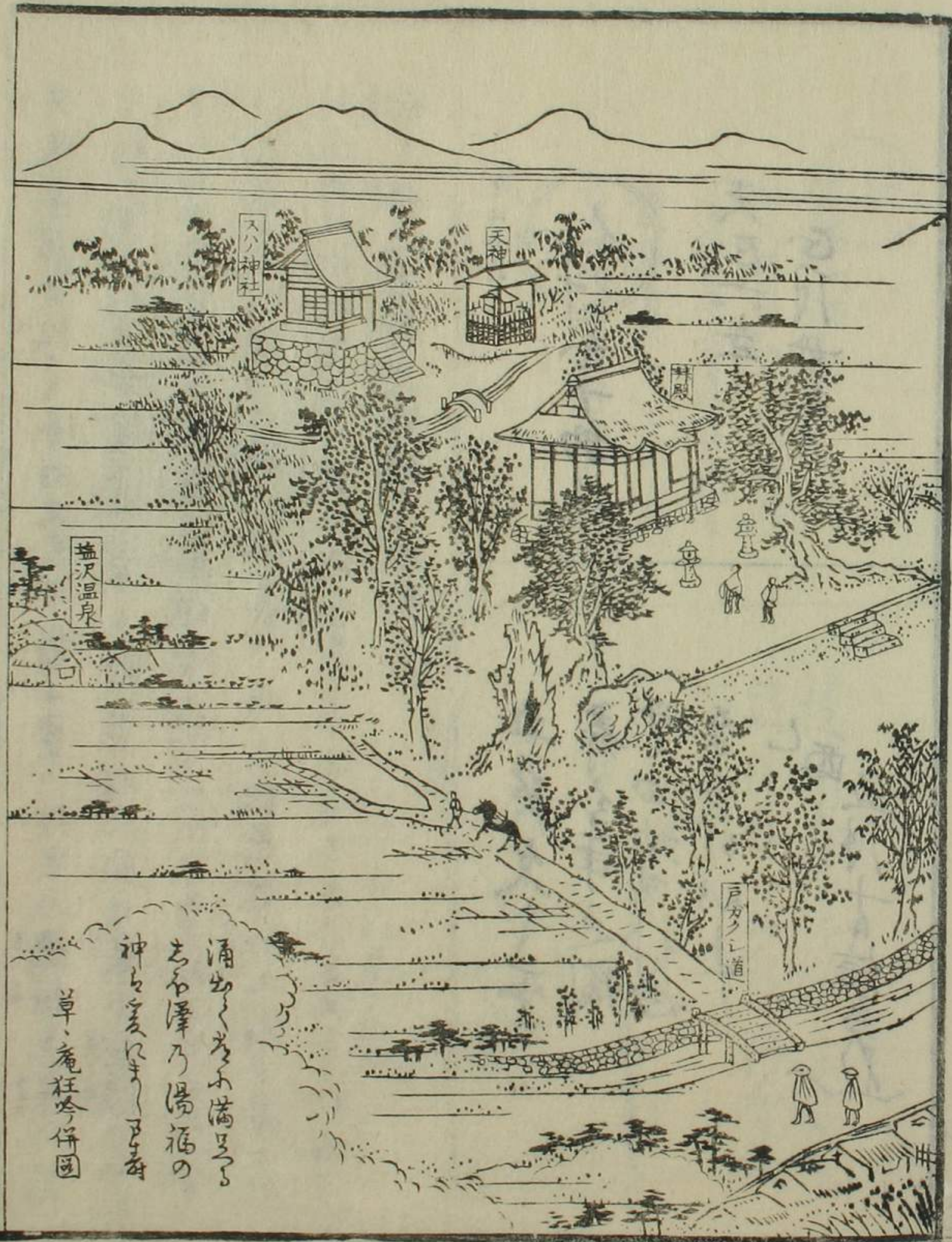
こゝれ神少老名の造りてん茶の山にさきさうを
久老
みの緒乃令のよと茶山なき川流をいさむきひてれ 後足

薬山の麓を巡りて四丁より小長系に温泉あり其下の流を淡川といひ
山吹乃瀬ともいふ兩岸に山吹多くある故名ふあふかふへ春の末夏
はちど先以川色の岩種小遊をさちさく酒酌と盆など流へ家海を
忘るも病を治し命と延る仙境のむびろふ

いづれふたふたの目敷と流きてまを流し山吹の香 慈徹

湯福神祠 如まきの西より 戸隠街道なり是より登の坂路ゆく下り
若光寺三社の甚 たり先八町宅より塩沢といふ所に温泉あり人家の側は浴室とくゆへ

火を焚佛を味ひたりゆりまより七曲て坂路を登る右に方に清水
の涌出るあり豊清水といふ岩毎と二ツ並上ると旅人の用とたり下
を牛馬に飼ふと登る大石とて大なる岩左に女夫石
風越といふ所小別道石標あり 左戸隠道 右在に乃 此所の福壽庵に風越乃
地藏ありまをて荒安村小針る右方の山小飯縄明神の里宮あり傍
小仁科氏なる郷士 秩石 あり即ち明神の社勢ゆく勤行の服麻上下着せて
公經を補ふといふ其家系れあはれと聞けらに頼朝公の以より千日
大まといふ仙人飯繩を岳に住む飯縄権現の社司たり此粵に仁科の森
乃城主小仁科尾張守とて武田信玄れ舞なりしに永禄四年三月甲
府小徴一故あつて切腹表の城廢るいといふ男子一人女子一人を家
士等ぬ抱して此山小遊来り千日大まを頼む諾して男子を頼み女子
を當山小遊とす叶はる故越後へ落り上杉家に召おきしなり代
禁人謹信是を勞り養育せむ 此小女成長の後を智の奥へ嫁せむ名家の娘とされ
てて妻の氏を以て仁科と改め今藤上杉家小仕友なり



涌出くろ小満里
志和澤乃湯福の
神とまじりて
草、庵狂今併園



湯福の神祠 祭神諏訪
戸隠街道
塩澤温泉
横沢丁八幡

其後年月と經く千日大吏甲府小登り信玄乃機嫌を窺ひ罪
 なる小兒一人と吾等が許し申すに仁科の家を立揚り申
 中とて信玄の怨敵乃跡何を致さん千日大吏嗣子かたれば幸
 ひ貴子と云はるゝと賴仁科甚十郎と認免朱印を押して是が仁
 科の跡に禮授せしめ賜りぬと云ふ千日をあはせしめ仁科と
 稱し依之古證文救通を納む

朱印九珍

仁科甚十郎

天正六年

正月廿三日

五亥文く不
 奇を申之間
 量油筋四利念
 手頃以上
 酉
 五月十日信玄在

三十一

朱印九珍

飯繩山々事

此父典言不有拍外時
 不て五右衛門以依る
 武運長久く利念
 不て後退轉を也
 四出傳

弘治三丁巳

二月廿三日

飯繩く
 千日

從中お孫清波く長力て
 被清撫く飯波位も也
 仍傳

丁卯

乃中太炊師事

十月十六日

朱印七珍

千日とある

飯繩く

- 一 佐州飯繩大明神清社願々事
- 一 致信致費 上御月 一 志費六百 上屋月内
- 一 珍費 小端月 一 志費 小御月内



飯繩の里宮
 同奥の院
 鍋蓋権現
 笠立山
 級ノ岑
 仁科氏の宅
 桂山古城

一 寺費 一 瘠之月 一 拾費 一 千田之月
一 寺費八百 市村色 已上

新寺寄進

一 寺費三百 入山之月 大文 一 七費 廣佛之月

一 拾寺費六百 南口之月 伊毛井村 在寺梨窪山内

右此計彼家許年沐之寺傳法為家寺氏運
長久者 作之狀如件

元龜元年庚午年

九月日



寺方 澤正忠奉之

千日次部奉之

定

版繩所神於此先高平判法寺附之上之自今

已後孫寺之五山和遠早賣寺由山家寺氏運
長久之由新念寺之五山和遠早賣寺由山家寺氏運
仍如件

天正八年

寺方 澤正忠奉之

田三月十日

寺方 澤正忠奉之

定

後四 寺費 寺費 寺費 寺費 寺費 寺費 寺費 寺費
後八 孫寺 寺費 寺費 寺費 寺費 寺費 寺費 寺費
寺費 寺費 寺費 寺費 寺費 寺費 寺費 寺費

版繩大之神如旧規本山傳法寺之寺方在寺不還任
以有之拾七人之由普請役由免許由寺方文中

修造之法善清嚴重この技勤仕は夜
作れどもや仍必件

天正八年

三月十日

朱印 御初見法也

千々守の友

此外の古書墨之右の古説文と以て今を見らむにむう神領此許多
なる社頭の莊庭から幸思ひたるは下

飯繩大明神祭神と天神第五偶生の神神大戸道尊と齋祭本地大日
如来也て即不動明王変相也く彼らに修い火防隨一の神徳也といふ
とあるありしに衆生濟度の為地藏菩薩と現ト武門擁護乃為也
勝軍地藏と現トありし其の冥感測るべくは縁起下界貝原氏云
是より本岳
奥宮に登る 荒安より 慶男れ導伴也く家僕小神供れ調度也くは糧服也
三重あり

取持して磐頭淺面と踏むぐやえん坂を越え入坂をせよと土生れ小屋あり
主の老夫ち髮楓服壞く柴の煙篋れ水俣心細くも爰に悲ひ遙く
登せばだつちらといふ池 池の中い 巡り飯繩原に歩る二十丁ちて行て嶮
しに坂あり 約一 岩角と足かりとて根笠把り十五六丁のぼるけ所
小千日屋爰とて此一れ平地あり 千日大夫安所 俱利伽羅不動の石像也
ちて腰下ち折れ失くたしその石工の鹿拙なる中古以来の物も非
ざるの峭壁も不動の境とて清潔なる飛泉ありが今も山崩岩落
てそれ跡も形く但峯岫の溜湫洵溪も溢る山腰に七つ池と成て
ちろく号あり東より南西へ算きば所謂みのぐやち 大小二つあり 大池丸
池新池ありちち一のちら等なり是より拾丁余のぼる嶮岨目も
眩くさうりちく言柔もも迷ぐぐく漸く頂子到り糸籠舎の茶ふ
く息を續ぎ汗を拭すり東南を眺らば富士峯幽遠ありく和由
嶺ありちちり浅河山も煙もち昇りて同好どそれと知るは千曲

川犀川を悠くして龍蛇れ横りり等一其外作き見れ巖崖
を凄涼と眼下に峙立又西北に顧き戸隠奥嶽の山脉高妻乙
妻釧の峯黒姫山に結き越後れ赤倉山神戸原山鞍骨山及び摺
貝摺明光山北八条を群峯威儀を列ね尖峭やして緑變して
黒く雪まき白く儲き佐波の嶋山を黛れおき北海乃陰浪天
を渡して渺く事

抑る飯繩が悉く既ふ冷際に至るる時をぬ寒風来りて肌を通
雲霧常に朦朧として峯の露を掃く今鳥也幸ひめて
一天晴明るれば登山して年来の願望を足ぬこれ併る大山
祇れ神の擁護且も天道に助るる人ハ幸の幸と得人便神酒と持
燈明を挑け宿務と敬白に扱嶺の内五丁に北東へ根盤を分
兼根盤生えり積り麦畑のど一季林はうり毎年里民これを扱り粉削と
赤子に作り合の美味して竹の子は香ありと有り
沼田の畔れ如く土扱りなり小岩扱る砂系の根盤を分所あり是飯

砂のある所なり上面の砂を掃除く岩の隙をありて七い出せば
級のぬく粟級れおく採く服を赤れ扱りありて何の香気なく
風味とそりたり腹おえるとして障るる哉
此砂みどりふえてあり人
山神をいふとついで
さるをさ一室去妻おせんすと社司にち社司其佐言て喝へ一扱りて扱く於て砂り一扱
水にほしとバ又おるふり人こ小味へおむるふみれく奇異乃ひりひをかり有りぬ
実乾坤の向小かる不思議の外おありやいもご不問 想ふ小む飯
砂れ名に負ふるも世小書傳る飯繩乃文字ハ常くさや飯砂るる
と仁科氏お語さば文字の現りたれありたりやとく驚く言を詢むる岩
を藥艸多く今小黃蓮の花盛なりまの蒲萄の蔓もいれ纏ひふま
て所々に村山やそ花の家の中より此靈岳二十六の巖窟十八乃谷
あり北裏やを雪所々に見まの爰彼亦大岩あり又天狗の遊場
てい凡二百坪もありる白砂や其盤の面れおくゆき深き小池三
有り今水毎月の央るに厚れ氷閉く瀧れほくも又さすか赤靈岳に
遊むる遠く千重の浪とかく崑山乃玉を拾ふありて遠く

むく西行上人の國
 遊歴者人なり戸隠ふ
 ありんきて板鏡原を
 通らむがこころの傍わ
 兎の窟を採拾するて
 びびりてみるかと地と
 たふよき強ひて見
 社の本をふてかいらを
 ぞんんのしけるまより
 戸隠の目乃街子れ
 社頭下橋の盛り
 ありあがり初れ子の
 上人を見て此橋か
 つくのありはれを西行
 けららどとんるより
 ちやく本よのぼる



と口きこみわりきまば
 大のやうなる法沙きこれ
 やはごきりる上人のたの
 思ひやれ是れ人よ
 けらら登りてら
 あらり所んそ
 是より引返
 安曇郡佐野の
 うへ通る左明山
 けやわりとん
 すと



其山乃寶と求むもあらず唯戸隠一里の山に僅一里の山なりたれば
あつむ人乃一度の山に神れ奇特を湯作し飯砂をも試み
神誓言十三ヶ条縁起小乃如く幸福を得んや何の神なりんこれや明
の士人陣生とつる海上暴風小逢く圍らばも蓬萊嶋小つる一ヶ
窟髪れ老僂恟むく一室小饌そ其器皿金玉すく蔬茹みぬ藥乃苗
かりつるに齊しく浮世の外とぞやせむりきりれ

叙起

人皇十六代應神天皇此御宇當山小跡を垂結ひしより五十四代
仁明天皇此御宇まても登山する人もなかりし嘉永元年辰三月
學問行者始く山頂に針といふ其後久しに星霜を経く天福元年
春三月尊容を鑄模し寶殿を頂上此西窟に造管しより順路
湧くいしきて士民登山するを導く天文元龜此頃武田伝吉
殊は湯仰し結ひ種々の靈驗ありとありより若平社領を寄附
し莫右の費用を輔く本宮を再建し乃ひ里宮を造管し

漢事始

夏と前件の古證文と見ても知るべきなり
汝くつひ山乃麓小何去といふ村あり按小西行の款よ武士の習ふ
きさみら地びと一わけ戸れとあり也とのいさしひけ初み出する地
多小也或り云是戸のありやアを云く付むしを戸をいひわん退きと急なる
道甲南山記小曰麗山氏の時山谷肇く分ふ
天地の始混沌として未分とざる時只是水火の二物のあり水の滓濁
凝く則地とれる礫ハ漸来りて砂を湧起がぶくたる今高山に登
て群山を望むに其形波浪の勢ひのごとくたると云く知るべし其始
究く軌方り後方に凝増く便し其滓濁の湧起りて高麗野ハ
山岳と成り巖濤れ不少なる川と成り大海と成る其理自ら分
曉なり右小つる仲起海陸を治め庖犧氏川岳を定め麗山氏山谷
をより川をいへば只海陸を治る川岳の名を定め山谷を分る
夏より始く山海を開きるやいふ小くいなるはべし

塩尻

朱子曰天地始^ハ想^ス只^レ有^ル水^ニ火^ニ者^ハ水^ノ之^レ滓^脚便^成地^今登^高望^羣山^皆為^波浪^之狀^便是^水泛^如此^只不^知因^甚麼^時處^了語^類

予このく、抄州有馬近き大甲山小登り侍一肘左なり一傍は信を福一侍
ア一うげ小くくの勢い浪のまうこなりける勢州安徳郡中や掛糸とて後を
家の所侍らそくに貝石山とり一岩山あり山上れ石の中小石貝ありるを破て
出に飛侍一あり螺の殻あり裏裏して黒石なり癸巳は仲夏成人とり
始ありてそを侍りるは信はよや少將義行口の所記のふす中に見あり
とえ来定人侍り一が侍のあよりるは始なり某侍の貝ると一殺の物之蓋
太古此等も海中かくて有つらん朱子乃説を以て視るに海水漸時に退と
軟泥化して硬石と淋り一侍貝芥その裏ふ含まれ回く侍てると成一也天地
のあいと思侍まへくくさ侍り多し

善光寺道名所圖會卷之三終

